

茨城が誇る水墨画の巨人

茨城県出身の芸術家で、国指定重要文化財が一番多い人は誰か、ご存知だろうか。江戸時代に書かれた日本画人伝『本朝画史』という書物に、こんな記述がある。「雪舟在西辺、雪村居東極」と。意識すれば「雪舟は西国にあり、雪村は関東にいた」という意味にとれる。

後世、この記述から二人の画人は「西の雪舟、東の雪村」と呼ばれるようになった。二人が生きた時代は、今から約500年も前の室町時代。以来、雪舟(等楊)、雪村(周継)は、僧籍をもつ画僧であり、日本を代表する水墨画の絵師として絵画史に名を残すことになった。

ところが、「水墨画と言えば雪舟」といわれるように「東の雪村」は、雪舟に比べ知名度に大きな開きが生じた。その理由を特定することは難しいが、理由の一つに、国指定文化財の数の違いを挙げることができるだろう。文化庁の『国指定文化財等データベース』をみて比較してみる。

雪舟は、なんと国宝が6点。重要文化財は「伝雪舟」表記の5点を含めて合計15点もある。雪村は国宝がゼロ。重要文化財は「雪村自画像」を含め9点。国宝が6点もある雪舟とゼロの雪村。国宝の有無が知名度の差となって表れてしまったのかもしれない。

しかし、茨城県内の芸術家に限ってみると、重要文化財指定件数が9点という画家は他にいない。茨城県を代表する画家として真っ先に上がる日本画家の横山大観は、同データベースでみると、重要文化財指定作品は2点。この数からみても、雪村の指定点数は、ずば抜けて多い。

雪村は、戦国時代の1500年前後、当時「奥七郡」と呼ばれていた茨城県北部の一角、現在の常陸大宮市で生まれたとする説が定説となっている。『本朝画史』は「佐竹一族而常州部垂村田郷人也」と記述している。部垂とは、旧大宮町の呼称で、「村田郷」について

雪村

Sesson

江戸時代の地誌『新編常陸国誌』は「按ずるに今の下村田村のこと」と指摘する。

同時代に書かれた地誌『常陸国北郡里程間数之記』は、さらに踏み込んで書いている。「下村田」の項で「雪村翁ハ常州久慈郡水戸領下村田ノ産也、何某氏の恵男也、館迹荒て西ノ方山根ニ有、土人雪村屋敷と云、少去りて坪井と云あり、田ノ中より潺々たる冷水湧出す、雪村硯の井とも云(以下略)」と述べている。

雪村は歳を経て生れ故郷を旅立った。現在の福島県会津若松市に赴き、さらに栃木県内を経て神奈川県小田原市や鎌倉市の寺院で絵の修業をしている。再び福島県に戻り、郡山市の「雪村庵」で晩年を過ごしたとみられている。この間、多くの水墨画を描き残した。

美術史家でもある岡倉天心は「雪村は雪舟と阿弥家との間にありて、雪舟を表面とすれば、その裏面を画けりと称すべきものなり」(『日本美術史』)と高く評価する。例えば、二人はコインの裏と表の関係にあるとまで

言っているのである(文中敬称略)。

主な参考文献

『訳注 本朝画史』(狩野永納編、笠井昌昭・佐々木進・竹居明男訳、昭和60年、同朋舎出版発行)、『常陸国北郡里程間数之記』、企画展図録『水戸と奥州をつなぐもうひとつの道 南郷道』(平成26年、常陸大宮市歴史民俗資料館編集・発行)等。



合併前の旧大宮町時代に建立された「雪村筆洗いの池」の記念碑＝常陸大宮市下村田(筆者撮影)

偉人から読み解く「波及力」のヒント

歴史ジャーナリスト

常陸大宮大使
茨城県郷土文化研究会 会長
雪村顕彰会 会長

富山章一